

第1回 WG 開催後に各委員からいただいた意見

1. 第1回 WG 開催後の意見交換の状況

○ WG の議論を受けた取組み方針に係る意見交換

- ・ 専門家
境委員（8/31 訪問、12/10 訪問）
- ・ 学校教員
中川委員・柴田委員（9/14 合同で実施）、武市委員・深瀬委員（8/31 合同で実施）
- ・ 学校教育行政機関等
富田委員（8/6 訪問、10/14 訪問）、佐々木委員（9/1 訪問）、水上委員（9/1 訪問）

○ 学習素材の活用・実践例および自然再生事業地の活用に係る情報収集、意見交換

- ・ 学校教員
中川委員・柴田委員（11/11 合同で実施）、深瀬委員（11/11 訪問、12/9 訪問）

2. 訪問した委員からの意見

○ 『取組み課題1 湿原を題材とした学習素材の収集、活用』について

- ・ 素材そのものから授業への活用を考えられる力量を持つ先生は限られる。素材と活用の仕方がセットで多様なものがあれば使われるだろう。
- ・ 湿原を素材として活用していくという気運は現在の学校現場にはないのではないかと。社会見学で寄ってもらい、マスコミに掲載される等の気運づくりが重要。唐突に資料の案内が来ても、なぜ湿原を活用するのかというハードルが大きい。
- ・ どんなに優れた教材を作成したとしても、活用は、関心や熱意を持つ一部の教員に限られる。活用する教員をどのように増やしていくか、巻き込んでいくかといった人づくりを如何に進めるかが問われている。取り組むべきことは、資料づくりではなく、具体的な仕掛けを作っていくこと。

【活用方法の例示について】

- ・ 短い素材を多く多様に作成する方が学校現場では使い勝手がよい。ワークシートは使用する教師との思いがかみ合わなければ使われないことの方が多いだろう。
- ・ 学習の使用場面が入口でも出口でも情報の出し方に変わりはないが、児童への問いかけ方、教科書の学習とのつなげ方が異なり、これらを例示することになる。
- ・ 教科書での学習の入口や出口としての活用は、教科書との関連性の整理が必要となり、単元の間で使う方法が最もやりやすい。実際に湿原を訪ねることができれば、子ども達の関心を引くことが出来る。子ども達のツボにはまるものは多く、そうした視点での活用が有用。

【地域素材を扱う場合の評価について】

- ・ 単元の一部での地域素材の活用であれば評価の問題はほとんど関係しない。評価項目によっては湿原の素材を題材にして自前で作ることもできる。湿原に行った子ども達なので、意欲を持って取り組み、湿原にしかない種等、固有名詞で認識する子もいる。
- ・ 実力のある先生でなければ、活用例を参考にしながら授業計画まで組み上げることは難しい。イメージとしては、ワークシート集のようなもので、素材と活用法、評価のつながりが見えるような資料が有用。

○『取組み課題2 自然再生の学校教員への活用促進』について

- ・学校との距離や移動手段、フィールドの条件など、現実的に活用が可能かといった視点で捉えると、フィールド毎に活用可能な学校は概ね限られる。流域全体を見て、どこで何ができるのか俯瞰して取り組んでいくことも必要。
- ・視点の提供は専門家が、授業で使うための表現の部分を現役の先生が担う形でワーキングが機能すると良い。実践の過程で作られたワークシートを蓄積する形で「活用例」「活動例」が厚みを増していけばよい。
- ・授業の位置づけは実践毎に異なるため、ワーキンググループにおいて複数の立場の人間が議論しながら授業計画を作り上げていくことは現実的ではない。ワーキンググループは、教員が活用したい時に、すぐ活用できるような様々な引き出しを用意しておくこと。どのように支援していけるか、学校や教員との接点をどのように作っていくかを考えていくことになるだろう。
- ・児童が訪れることができるフィールドは限られ、温根内が中心。違う景観、場所に、テーマを持って訪問する機会づくり、専門家の紹介や現地でのアテンドなどを期待している。

○『取組み課題3 学校教員の関心喚起、湿原の教育的な価値の普及』について

- ・国立公園内、湿原内であっても、こんなこともできるということをもっと先生方が知れば、関心を持つ先生も増えるのではないかな。
- ・子ども達に実践している場面を見るフィールド学習の機会を研修講座としてつくれると良い。
- ・教員研修は、教育業界で注目されるキーワードを意識して企画し、市町村の教育研究所の部会と連携して実施できると良い。指導方針にあるキーワードを用いると現場教員にフッキングしやすい。湿原の活用法を伝える場作りを意識できると良い。
- ・学校や教員の現状を踏まえて、一步踏み込んで普及を狙うのであれば、本来は湿原を中心として各教科、総合とどのように連携させ実施するのか、授業計画レベルまで仕立ててPRしていくことが必要であろう。力量がある先生は非常に限られ、そうでない先生に踏み込んでいくには、それなりの手立てが必要。
- ・学校内でWGに参加している先生と認識されると、他の先生も興味を持ってもらえ、発信力が違う。様々な学校からWGに関わる先生が増えるとよい。
- ・教員研修については、更新講習で湿原をテーマとしたものがあると良い。教育大の3年生が行う教育実習を対象に考えても面白い。大学1,2年生で湿原を含めて地域を学び、教育実習の機会に子ども達に伝えていくことを後押しできれば良い。

【教員との接点づくり】

- ・教員が集まる場で「WG」の機能をPRする媒体がない。WGの取組みのアウトプット（学習素材）をチラシとして配布しても、まず教師にはフッキングしない。学習素材はWEBサイトへの誘導があれば十分であり、「WGの機能・取組み」に関心を持ってもらえることが入り口として最も重要。湿原学習に関して困った事に対応し支援すること、支援メニュー、連絡先・WEBサイトのアドレス、構成員（信頼性の担保）が紙媒体に明記されていれば良い。
- ・ニーズがない時期には目にとまりづらい。授業の詳細な計画を検討し始める5月頃、2学期からの取組みを検討し始める夏休み終盤の時期が妥当。
- ・WEBの見せ方を変更することが必要。情報の塊に名称を付したメニューでは教師にフッキングしない。教師の活用を意識した項立て、まとめ方が必要。例えば、生き物観察、講座・人材紹介、資料、地域別情報等。
- ・釧路市内の全小学校6年生が遊学館に行き、1日理科の実験等を行うサイエンスルームの1コンテンツとして入れると良い。単元と連動したものではなく普段体験できない理科実験に触れる機会。春に学校に送付されるリストから各学校が体験したいコンテンツを選定する。まずはリストに入ることができれば湿原学習に触れる学校を増やすきっかけとなる。

【自由研究発表の活性化、実践発表の場作りについて】

- ・自由研究発表の評価については科学的な視点から事前に評価項目を決め告知すればよい。しっかりと評価することで学習の動機付けにもつながり、そうした仕組みづくりと学習の支援を行っていくことで、とりまとめてきた情報の活用や支援が機能するのではないか。他にも考えられることはあろうが、こういった教員や子どもたちを巻き込んでいく仕掛けが必要。
- ・自由研究発表会の活性化は、様々な体制を整えられた後のゴールの一つで、そうした土壌が作られてから検討することであろうが、そこを目標に向かって取り組んでいくという考え方もある。実践校の成果を持ち寄り、学習を共有していく場合は、実践校の同意が得られれば可能で、発表の場を設けることは子ども達にとっても意欲向上につながる。
- ・湿原の視点だけではなく、環境という範囲であれば可能性はあるだろう。
- ・子ども達にモチベーションを与える上で、発表の場が学校外にあるということは非常に良い。発信の場の設定は学校でも苦勞しており、期待できる。

○その他 湿原の活用促進にあたっての考え方

- ・地域外の人と交流を持つ視点から湿原にアプローチする手法もある。自身の地域を知ることとは、他地域と交流する上で必然の要素。既に交流校を持つ学校を対象としたり、湿原を訪れる観光客に対して伝える場を新たに作り出しても良い。
- ・きっかけ作りとして学校を捉え、学校外で湿原と接点を持つ機会・情報を、教員を介して児童に伝え、学校外で児童を支援していく一連の仕組みができるのであれば期待はできる。
- ・学力向上の視点からも、総合の体験を柱に、教科にフィードバックしていくことで児童は関心を持って単元の学習に取り組む、学力の向上につなげることができる。子ども達の視点で広がりが出てくるもの、目に触れるものが多く多様であるものが素材として適しており、こうした視点からも釧路湿原は活用の価値を持っていると考えている。全ての学校で当てはまるわけではないが、それらを体感できる機会があり、各学校が有する制約を踏まえて活用が現実的であり、人、情報、ノウハウ、物といった適切な支援がセットであれば、実施を検討出来る機会が巡ってきた時に、活用する教員は出てくるのではないか。
- ・湿原という視点だけでは関わる意味が難しい部分がある。環境教育という部分で、自身で何が出来るのかを見つめさせる機会づくり、自然との折り合いの視点を持った情報発信を期待している。
- ・WG に求める役割は、1) 情報、2) 資材・教材の貸出、3) 人材の紹介の3つの視点。WEB からは、教師が欲しい素材、情報は得られない。例えば、以下は自身として期待する教材。
 - ①児童が使う前提の図鑑（内容の質も伴うもの）
 - ②身近な生き物と湿原に生息する生き物を比較するシート
 - ③調査のための児童が使う前提のシート（例、既存も水質パックテスト等の説明は難解）
 - ④自然を読み取る手がかりがまとめられた資料
 - ⑤湿原流域圏を含めた地形立体モデル（実際に湿原部に水を入れ、遺跡との位置関係も見ながら、かつて海であったことを感じられるもの）
 - ⑥地層断面サンプル（地面の下の見えない部分を理解できる）
 - ⑦アクリル標本（本物が見られない場合、パソコン、図鑑等の二次元より実感を促せる）
- ・教材開発の視点と環境単元での活用は区分して考えることが必要。湿原がこの地域にあることが地域素材としての活用・教材開発の視点。環境的にどのように使えるかが環境単元での活用を考える視点。
- ・市町村指定天然記念物を切り口とすれば、なぜこの地域に生息しているか学習を進めれば、この地域に湿原環境があるということは扱うことになる。